

浜松市における「多文化子ども教育フォーラム」の立ち上げ

静岡文化芸術大学文化政策学部教授 池上 重弘

フォーラム立ち上げの背景

静岡県浜松市は、日本最多のブラジル人が暮らし、行政や教育機関、さらに市民団体等による多文化共生の先駆的取り組みが展開する都市として広く知られている。2012年3月末現在、市の総人口は約82万人。そのうち外国人は約2万5千人で全体の3%を占める。しかし、合併前の旧浜松市エリアには外国人が集住する地区があり、外国人児童生徒の比率が十数%に及ぶ小中学校もある。浜松市内ではこれまで、数多くのNPOやボランティア団体が外国人児童生徒の学習支援に携わってきたが、関係団体が継続的に集う場はほとんどなく、団体間の連携、学校と団体の連携の面で課題が指摘されていた。

そこで静岡文化芸術大学では2012年度、外国人児童生徒の教育環境改善に資するを進めるため、主として浜松市内で支援活動を展開するNPOやボランティア団体等、実務者や中間支援団体の関係者、学校教諭、支援員（市教委に雇用される外国人スタッフ等）が集まるフォーラムを立ち上げた。これは本学の文化・芸術研究センター長特別研究「多文化共生社会の実現に向けた交流支援と学習支援のあり方をめぐる実践的研究」の事業として位置づけられており、浜松に所在する公立大学としての地域貢献活動の一環でもある。

NPOやボランティア団体のリーダー、国際交流協会のスタッフ、外国人児童支援で豊富な経験を持つ元小学校教諭らが、準備会メンバーとして企画段階から運営に至るまで関わっている。準備会での検討の結果、名称は「多文化子ども教育

フォーラム」と決まった。英語名称はForum on Intercultural Children's Education、略称FICEである。多文化共生に関心を持つ浜松や周辺の人々にとっては、浜松国際交流協会（HICE）と似ていて覚えやすいと考えた。Interculturalという英語は日本ではまだなじみが薄いだが、浜松市は多文化共生都市（インターカルチュラル・シティ）という理念の推進役として2012年10月にサミットを開催しており、市の目指す方向性とも一致している。フォーラムの英語名称には、母国（ないしルーツとなる国）の文化と日本の文化の間に生きる外国人の子どもだけでなく、多様な文化的背景を持つ仲間と一緒に育つ日本人の子どもの教育も視野に入れて考えたいという意図が込められている。

フォーラムの概略

フォーラムはメンバーシップを固定しない継続的な機会である。運営の実態としては会議というよりワークショップに近く、外国につながる子どもの教育や関連する課題に関心のある方に参加を呼びかけている。また、直接教育に携わるのではないが、家庭の問題に深く関わりうる民生委員・児童委員や自治会関係者など、地域に根ざした方々の参加も期待している。市長部局や市教委、国際交流協会と連携しつつ、以下の活動を行うことを目的としている。

- (1) 情報交換と情報共有
- (2) 浜松市および周辺地域における教育支援の全体像把握と課題抽出
- (3) 課題解決に向けた検討
- (4) 検討結果に基づく自助努力、連携の取り

組み推進、提言

(5) その他(勉強会、講演、ワークショップ等)

提言先の具体例としては、浜松市教委が年に3回開催する「浜松市外国人子ども支援協議会」(会長:池上重弘)や筆者が委員を務める静岡県多文化共生審議会等を想定している。フォーラムの立ち上げを市教委の協議会で表明したところ、市教育長からは「大学のネットワークで支援現場の声が集まれば外国人の子どもの教育の向上に結びつくだろう。フォーラムで上がった意見も聞いていきたい」(静岡新聞2012年2月10日の記事より)とのコメントが寄せられた。

これまで3回のフォーラムが開催された。以下では、これらのフォーラムについて紹介しよう。

第1回フォーラム

2012年6月2日(土)午前に静岡文化芸術大学で開催された第1回フォーラムには、学校教諭、支援員、市民団体メンバー、外国人保護者(主としてブラジル人)ら約100人が参集した。呼びかけ人である筆者がフォーラムの趣旨を説明したあと、市教委担当者から「浜松市における外国人児童生徒教育の取り組み」の題目で取り組みの全体像が説明された。次に、準備会メンバーのうち、学習支援を幅広く展開する3団体の代表の連名で「外国につながる子どもたちの教育をめぐる想い」というタイトルの発表があった。市内3校の支援状況の紹介・分析に基づいて支援内容の問題、支援者に関する問題が明示され、望まれる支援体制のモデルが提示された。さらに筆者が文部科学省の最新動向を紹介し、2012年4月の「日本語指導が必要な児童生徒を対象とした指導の在り方に関する検討会議」において、今後は日本語指導を「特別の教育課程」として位置づける方向であることや、教員(または教職経験者)が指導に従事する方針であること等を伝えた。

その後、グループに分かれてディスカッションを行い、参加者が日頃感じている課題等を出し合った。多様な関係者が一堂に会したことでネットワーク形成の契機になったが、前半の説明部分が長く、ディスカッションは論点が拡散したまま

時間切れになった点が反省点であった。

第2回フォーラム

2012年7月21日(土)午前に静岡文化芸術大学で開催された第2回フォーラムでは、市教委経由での広報が十分に行えなかったため学校教諭の参加は減少したが、支援員や市民団体メンバー等を中心に約65人が集まった。また、フィリピン人コミュニティのグループの関係者が新たに参加してくれた。初回同様、筆者が趣旨を説明したあと、浜松市国際課職員が市の取り組みを紹介した。

第2回では、あらかじめ、支援体制、母語教育、学力保障、ライ

フコースの4つのテーマを立ててグループ討論を行った。模造紙と付箋ふせんを用いて議論の「見える化」を図った



第2回フォーラムでのグループ討論の結果報告

ため焦点の定まった討論になった。一方、討論時間が不十分との声もあり、次回以降への課題となった。

第3回フォーラムと今後の展望

2012年11月10日(土)午後に静岡文化芸術大学で第3回フォーラムを開催した。この回は学校、家庭、地域、行政の4テーマで分科会を設定し、十分な時間をとってグループ討論を行った上で全体討論を行うようスケジュールを立てた。

フォーラムはまだ始まったばかりだが、大学がネットワークの結び目になることにより、委託-受託の力関係や団体間の利害関係から離れて、自由で自主的な連携が広がりつつある。今後は愛知県豊橋市との連携を図り、愛知県内の先駆的事例を学ぶ機会も設けたい。また、市教委の協力を得ながら学校教諭の参加を促進する広報にも力を入れたい。教育においてはあくまでも学校が主体となるべきであり、フォーラムは学校をサポートするさまざまな立場の応援団が集うプラットフォームとしての役割を担っていきたい。